

ひさしくとはざりけるみをなむうらむるとよめる也。

齋宮女御集云、まくがたにあまのかきつむも玄ほぐさけぶりはいかにたつぞとやきみ。  
私云、までがたといふは、までとも聞えたり、まくがたといふは、なにをまくともさこえず、  
又玄ほたるともやくともいはねば、何事共きこえずや、此女御の歌ぞ、玄ほやくとはきこえた  
る、但證本を見るべし。

〔六百番歌合戀四〕寄海人戀

十五番 左顯昭

もしは燒海士のまくかたならぬ共戀のそめきもいとなかりけり○中略下  
判云、左歌、あまのまくかたと讀る上に、戀のそめきもいとなかりけりといへる下句も、優にも  
聞ざるべし。○中略 後撰英明朝臣歌はあまのまでがたいとまなみと讀るなり、此事往昔に、崇徳  
院御前に侍し時○中略 後撰の難儀とおぼしくて、此までがたの歌をまくと云て、釋もなくて只  
をきて侍しを、是はまでがた也、まくとひがこと書たりける本にむかひて、不審したるにこそ、  
侍めれと申て侍しを、後に人傳き、て、彼が門徒のまくと混じて、勘侍て侍りけるにこそ、いと  
まなみとは、までがたにて殊に叶へる也。○下略

〔僻案抄〕いせの海のあまのまでがた暇なみ長らへにける身をぞ恨むる

此歌、先人○後成藤原命云、往年參崇徳院之次、以女房給草子一帖、彼仰云、此抄物或好士稱秘藏物所持  
也、乍坐加一見則可返上物體可然哉、所存如何依仰於御簾前披見之際不及委細、即返上申云、古來  
書出如此物之時、雖先賢皆少々之事誤難遁候歟、此抄物又大概優候、但此中伊勢の海のあまのま  
てかたと書いて未勘と付て候此歌海士のまでがたと存候、海邊に蛤と申物、沙中に候其かたの候  
なるを見て、海人等いそぎてこれをさしとり候なるをいとまなしとは、詠するよし、基俊申候き